新しき血よ

柿澤　正志

宙に浮いた不確かな常識と連帯が
舞い踊る飛沫の底よりごおと流れ来て
ふと歩みを止めて見出した太古の昔の果実やら
幼き日のあの面はゆい仲直りのやりとりやら
熱き吐息の降りかかる距離から注がれるあのあどけない眼差しを
根こそぎ暗黒の海の彼方に運び去ってゆく
膨大なあぶくの群れのように
生まれてはたやすく結びつき
なお拡大する巨大な流れは
片目をつぶってのぞき見る
無機質な二次元の映像に
ある時は無制限の喝采を浴びせ
ある時は煮え湯のごとく沸き上がる心にまかせて
百年二百年後退した
未開の論理の罵りを容赦なく浴びせるのだ

ひとたび狼煙のごとく立ちのぼれば
それは我らが暗黙のうちにうなずきあった
動かし得ぬ真実であるかのように
不意に肩を押されて確固たる己もなく
膨張し続ける一つの思惑に署名する
無数の人びとを引連れて
もはや軍人でも政治家でもなく
それは瞬く間に海をも越えて

あの見はるかす連なりの屋根の下に隠れ
誰の目にも届きはしない閉ざされた宇宙に棲みながら
微かにその指で文字を打ちなぞる
あえて言えば巻き込まれた我らたちの錯誤へ
無限に彩られたあの日の炸裂を演出する影か

欺きと欺かれるものとの絶妙なパッケージ
怒りの連帯は深い闇の奥で
密かに嗤う者の手の内で踊り出し
謀られた潮流は突如として巨大な渦を巻き
爛漫と咲き乱れた万華の都市の闇のほつれに
サナダムシのように食らいついて大口を開けた
果てしなく膨張しゆくあの虚無の暗黒の腹の中へ吸い込まれては消えていく
消え残った灯をそのままに朝を迎えた忘却の街路地
薄暗き予兆を秘めた慣性の蠢きは
強迫された化粧たちの生あくびとともに
我らの皮膚を乾かしながら無軌道に通り過ぎたかに見えた
だがそれは確かに在ったのだったか
我らの知らぬかつてのあの日やさらに前のあの日の前に

舞台は軋轢の音を鳴らしてまた反転を始めるか
ならば焦燥の古木は枝を鳴らし
黒き鳥たちの群れは軌跡を破って挑み合い
もんどりをうって地に伏せる

長き長き坂道
その頂点の向こうは果て
その果てと生のはざまから
狂と絢爛の色を吐き出した一本の巨大な雲が
戯言に億万の殺を混ぜた

破れかぶれのちぎれた男の顔を先頭に驀進する

だが我らよ
その長い坂道に足を止め
灼熱の残骸に己を投げうちながら
大地の下で今ものたうち
生き続けている見知らぬあの日が
常に我らを希求しているのに気づくのであれば叫べよ
我らはけっして無力なのではない
そうだ我らはけっして無力なのではない

つんのめる五体を支えよ
五本の指をくの字に曲げて踏ん張り立つまた踏ん張り立つ
痩せ衰えた我らの証は
かつて茫漠とした荒野に浮かんだ赤い月を
たった一羽の老鳥が
聞き取れぬほどの叫びを哭いて横切った
その行く末を凝視する青年の遠き眼の奥の閃光
されば新しき血よその時こそ
その荒涼たる大地の底に深く差し込んだ
孤独なる者たちの叫びの杭にしがみつき
愛する人たちの暴走のうねりの中で
ついに覚醒した充血の目を開き
おお我が独自の叫びその生存の叫びを叫ぶのだ
ある時は嘲笑の渦に巻き込まれ
ある時は完全無視の豪雪の下に埋もれるとも
その燃えたぎる情魂を我らが壮たる大地から

ひび割れた堅き拳を振り上げなお振り上げて
己自身の牢獄に封じ込めた

今なお熱きその血を滲ませて湧き出だせ
紅蓮未だ色あせぬ戦慄の鼓動を
我が骸の上に焚きのぼらせて燃やすのだ